
R I N ~ 帰る夏 ~

南 陽子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R I N へ帰る夏へ

【Nコード】

N 8 8 6 6 E

【作者名】

南 陽子

【あらすじ】

一人の女子高生がいた。名を松本凜。16歳。特技は、細かいことは気にせず、我が道をゆくこと。一人の名もない少年がいた。13歳。世を憎み、人を憎み、誰も信用はしない。こんな二人が出会う話です。

プロローグ - 夢 -

……っ……う……—

誰かが泣いている。

苦しい。悲しい。寂しい。聞いている方が切なく、胸が締め付けられるような泣き方。

誰だ。どこにいる。子供のような気がするが、視界が悪くて見えない。いてもたってもいられなくて、駆け出す。でも、声がする方向が分からない。呼び掛けようと思ったが、どうやっても、口は張り付いて開かなかった。

……い……しい……—

どこにいるんだ。音を頼りにとにかく駆け続けるが、自分の足音は響かない。足が地を踏んでいる感覚もない。実際に前へ進んでいるのかも、分からなかった。

誰かは誰かを呼んでいる。思いを叩きつけるように、声がだんだん大きくなる。

その瞬間、声が耳元で聞こえたような気がした。

……ん……いん……りん……っ—

「……っ!？」

飛び起きた。その瞬間、手に伸び盛りの下草が当たってチクチクし、凜は自分が、学校裏の小さな丘にしていることを思い出す。計ったように、チャイムが校舎の間に木霊した。見開いていた目を細める。身体が重くて、動かすのが億劫だったが、ゆっくりと膝を立て、腕をその上に組んで、深く息を吐いた。暗い夢から覚めたことに、安心するよりも憂鬱になる。

「久々に見たなあ……」

およそ一年ぶりだ。最後に見たのは、あの事件のときのことだったから、よく憶えている。

物心ついた時から、繰り返し見る夢だった。始めの頃は、暗闇だけが目の前にわだかまっていた。それが歳を重ねるごとに、誰かの声を伴い、誰かの感情を帯びるようになり、胸を揺さぶるようになった。人の痛みがわかるようになったからではないかと、父さんは言うが。

手を頭の後ろで組み、上半身を落とすように寝転ぶ。さっきまで眠っていたので、下草は既に凜の身体に沿って倒され、思いのほか柔らかく受け止めてくれた。

夏の気配が濃くなってきた、と思う。青は軟らかく視界に広がり、雲はどうして落ちてこないのか、というくらい積もり重なって、その青の中に浮かんでいた。もう一度ため息をつく。

ふと、前方から聞き慣れた声が聞こえた。腹筋の要領で身体を起こすと、小柄な可愛い女子高生が、緩い斜面を登ってくる所だった。歩くこと、緩やかにウェーブしたロングヘアが、フワフワと揺れる。

小林美鳥^{こばやし みどり}。ちまちました動作と、愛嬌のある顔立ちで、男女の別なく保護欲をそそる容姿だが、そのほわほわした見かけとは裏腹に、結構なしつかり者である。凜とは、去年同じクラスになって以来、よく一緒にいるようになった。

美鳥が口の脇に手を添えた。

「りーん！もうお昼だよー！」

言葉の意味に気がついて、慌てて校舎に取り付けられた時計を見る。四校時はとくに終わっていた。

「えっ、嘘！またやっちゃった？」

自然、体が前のめりになり、縋るように美鳥を見る。

「うん、やっちゃったやっちゃった」

その目に反して、美鳥は軽く言い放った。

「マジですかー!？」

即座に立ち上って、駆けだす。もう遅いと分かっているとはいえ、このままここにいるのも気が引けた。足が草を蹴って、ザツと小気味よい音が響いた。緩いとは言え、斜面を下っているから、勢い余って登ってくる美鳥とすれ違う。美鳥が、止まる気配のない凜の背を追いかけてきた。

「あのねー！めぐちゃん先生が、放課後残れってー!」

予想外の名前に、思わず後ろを振り返る。

「めっ、めぐちゃん先生!？わ、わかったー!……ってか、止まらないんですけどー!」

「自業自得じゃないの？」

「ひどっ!？親友に向かってそりやないよ美鳥ちゃん!」

美鳥は呆れた、それでいて諦めを含んだ目を凜に寄こした。凜が言葉とは裏腹に、状況を楽しんでいることがわかっていているからだ。

足はもう、無理矢理止めたら転げそうな勢いになってしまった。まあ、このまま教室まで走ってしまえばいいか、と凜は思う。どうせ止まらないのなら、走ってしまうまでだ。

凜は顔を上げた。白く輝く校舎の向こうに、このまま駆けて、飛び込んで行けそうな青空が広がっていた。知らず、笑みはさらに深くなった。

第一章 - 日常 -

「……失礼しました」

凜は極力音を立てないよう、そつと引き戸を閉じた。

職員室前の廊下は静かだった。遠くでセミの鳴き声が、あとは窓の傍にある背の高い木の、風にそよぐ木の葉の音が微かに響いているだけだ。掃除を終えた後、凜が職員室に入って二十分程が経っていた。教室を出た生徒たちは、すでに部活に、帰途にと散っているだろう。凜は窓辺に寄る。また一条風が吹いて、凜の肩まで届かぬ髪を揺らした。それを受けて、ゆっくりと目を閉じる。そして、胸に詰まっていた息の塊を、力なく吐き出した。

「おーい、りーん！」

と、凜がすっかり溶け込んだ静けさを、なんとも気安く破る能天気な声が響いた。

凜はおどけたように目を回す。大体誰だか想像がついた。投げやりな台詞が口を突く。

「……修平。どうしたの？」

振り向くと、そこには予想通りの姿があった。

凜より頭一つ飛び出た身長、やや持て余し気味の長い手足に細い体。短く刈った頭は、伸びて四センチ程になっている。凜は真横まできた修平の顔を見上げる。小学生から一年前まで、いつでも私より頭一つ小さかったのに、と思う。自然、背筋が伸びて、やや挑戦的な姿勢になった。しかしそんなことは全く気付いた様子もなく、凜に歩み寄りながら春日修平は口を開く。

かすがしゅうへい

「帰らねーのかなー、と思って。しっかしお前、なんで学校に着いて早々、丘で寝るんだよ」

「なんか、昨日よく眠れなかったんだもん。朝のチャイムで起きるだろって思ってたし。なんで知ってたの？」

「美鳥に聞いた。そんでお前、めぐつちに叱られたの？」

「……めぐつち？」

「めぐみ先生のこと。空手部じゃあそう呼んでんの」

「……お前といい、美鳥といい、なんでそんなフレンドリーなの……」

凜はげんなりした。伸びた背筋も丸まった。

橘めぐみ先生。女の子のような名前だが、れっきとした男性である。端正な顔立ち、白衣と眼鏡のよく似合う容姿と、名前のギャップが頭に残るのか、去年来たばかりなのに、すでに全校めぐみ先生で通っている。化学の教員であり、温和な笑顔と、若いわりに、生徒の視点に立った分かりやすい授業で、生徒の心を掴んでいる。また、修平の所属する空手部の顧問と、2の7の担任、すなわち、凜と美鳥の担任でもある。

午前中まるまる授業をサボった凜は、職員室に呼び出しを食らったのだ。

「美鳥に聞いたときはびっくりしたね。めぐつちが生徒呼び出すなんて。で、怒られたの？」

「……まあ、注意？を促されただけ……」

凜はもごもと言った。

「ふうん。やっぱな。空手部でも怒ったことねーもんなあ、めぐつち」

そう言っつて、修平は考え込むようにする。

めぐみ先生の怒った顔は、見られたことがないという。叱るときさえ、ゆっくりと丁寧に言っつて聞かせるようにする。感情が欠落しているのではという噂すらある。それで生徒に舐められないのだから不思議な話だ。

凜はこの教師が苦手だった。嫌いと言っつてもいいかもしれない。

だが、人気者をけなすというのは場の雰囲気壊すものだ。

話を変えようと、凜が口を開いた。

「修平、鞆は？」

「あ？両方とも上。取り行かなきゃな」

「あ、そ？」

そういいながら、凜はさっさと歩き出した。その後を、修平が苦もなく付いてくる。

「くっ、コンパス（足の長さ）の差か……お前、また背伸びたんじやないの？」

「さあ？どうだろ、お前を越してから一度も測ってないんだよな」

修平のどこか鼻にかける言い方に、凜は齒ぎしりした。凜はムキになって引き離そうとし、修平はすぐに追いつく。二人の歩く速度が徐々に上がっていく。

「あたしだってっ、成長期の睡眠不足さえなければっ」

「いやあ、今更後悔しても遅いだろ、はっはっはっ」

修平がこれ以上ないほど朗らかに笑った。

「身長が何さ、修平なんか校内順位あたしより100番も下のくせに」

「あー！？そりや関係ないだろ、お前が高すぎんだよっ」

「おばちゃんに言いつけてやるー！！」

「凜！汚ねーぞ！母ちゃんを利用するなんて！」

今や、二人の口論は走りながらのものとなっていた。真新しい鞆を背負った、一年生の女の子が、立ち止まって怪訝そうにすれ違った二人を目で追っている。が、二人は気付かない。

「大体、今どきお母さんが怖くて成績表隠すアホがいる？どうせ夏休み中の三者懇談で明らかになるっていうのに」

「うるせえ！お前は母ちゃんの本当の恐ろしさを知らねえんだ！」

「おばちゃんに向かって、なにその言い方！お前がそんなだからおばちゃん怒るんでしょー、あたし怒られたことないもの！」

「そりやお前がお気に入りだからだろ！俺なんか空手やってんのに勝てねえんだぜ、どういうことだよ！？」

「知るかつ！」

凜の声が笑い含みになった。凜の家と春日家とは、家の近いこともあって家族ぐるみの付き合いである。特に凜は、しっかりものの

修平の母親が好きだった。脳裏に、ふくよかで元気なおばちゃんの姿が浮かんでくる。春日家は、おばちゃんが主導権を握っていれば安泰だなあ、と場違いに凜は思った。

「ちよっとお二人さん」

ふと、上から呆れたような声が降ってきた。二人が脇の階段を見上げると、踊り場に小柄な少女が立っている。鞆を両手に持ち、一つは背に負い、その重さで体勢が前に傾いていた。

「美鳥！大丈夫？」

凜が階段を駆け上がって両手の荷物を受け取った。その片方、黒く大きなエナメルバツクを、階下の修平に投げる。

「なんでまた。今から取りに行くところだったのに」

修平が意外だ、というような声を上げた。

「……朝のめぐちゃん先生の話、ちゃんと聞いてた人」

凜も修平も、見事にキョトンとした。

「今日は放課後会議があるって言ってたでしょ！もう下校の時刻！」
美鳥が声を荒げると、沈黙が広がった後……。

「おおっ！黒板に書いてあった気が！」

「担任がそういえばそんなこと言ってた気も！」

と、二人の声が若干間抜けに響いた。あとには、美鳥の呆れきったような、諦めきったような溜息が続いた。

第二章 - 距離 -

少年は幼かった。だが、だからこそ親の機微には敏かった。何しろ、それだけが世界のすべてだったのだから。本当は、ずっと前から奥の深いところで気づいていた。ただ、その一言で、決定的になっただけのことだった。

世界はモノクロだった。自分の存在だけが明確で、他は周りにあるだけのモノだ。いや、その逆だろうか。自分が、この世界であやふやなものなのだろうか。

自分の中は空っぽで、何かが決定的に欠けているのだろうか。少年はそう思った。

「う、ごめんなさい、許してくださいっ！」

少年は、地面に座り込み、泣きじゃくっている少女を見下ろした。

それは、ただ上を見上げたら空があったというような、何の関心もなく、視線を投げただけのものだった。

少年の周りには三人ほどの少年たちが、少女を囲むように立っている。全員同じ学ラン姿だが、他の三人はその少年に比べ、より着崩した、教師に言わせればだらしない格好をしていた。全体的に動きにくそうな風情だ。また三人は、無表情なその少年とは対照的に、酷薄な笑みを少女に向けていた。幼い、優越感に酔った瞳と共に。

「お前黙れよ。誰もしゃべっていいなんて言っただろ？」

言われた少女は、強張って動かしにくそうに、ゆっくりと顔を伏せ、手を当てて必死にしゃっくりを堪えた。

「ねえ、こいつどうする？」

三人が一斉に少年に視線を投げた。中学に入学してまだ一月と経たないが、すでに三人には少年に指示を仰ぐ癖が付いてしまっている。問いかけられた少年は、何の反応も示さない。ただ少女の方に

視線を落とし続けた。

少年は入学当時から明らかに、他の生徒とは毛色が違っていた。異端者は時に、カリスマ性を帯びる。自然周りの人間は、寡黙で、そのくせ子どもとは思えぬ存在感を放つ少年に、始めは興味や好奇心、無関心と各々の対応を取ったが、一週間でただ二つの接し方になった。極力関わらないか、一目置いて取り入るか。

その後者を選んだ一人が、しびれを切らしたのか肩をすくめた。

「いいや、とりあえず金目の物でも出させてさ」

と、唐突に少年が動いた。三人は期待を、少女は大きな不安を秘め、それを目で追う。しかし少年は、両者の視線に込められた意味などに、興味はないというように、体を翻し、さっさとその場を後にしたのだ。その行動に思考が付いていけず、三人はしばし呆然とした。

「お、おい！」

「待つてよ！」

置いて行かれた風になった三人は、少女を振り返りながらも、しぶしぶと少年を追って駆けて行く。一人残された少女は、突然の解放に一瞬キョトンとし……安堵のために、今度は大声をあげて泣いた。

背後にその泣き声を聞いた少年の顔には、なんの感情も浮かんではいなかった。

空は綺麗な快晴だった。朝早くの空は雲ひとつなく、冷たく澄んだ大気にふさわしい、透き通った青だ。真夏が迫ってきているというのに、こんなに涼やかで瑞々しい空気が漂っているのは、深夜に降った雨のせいであるようだった。かすかに地面が濡れ、ところどこ

ろにある雑草が、ピンと葉を張っている。

凜は足を庭に放り出して窓のへりに座り、身体に新鮮な空気が行き渡るよう、息を吸った。とてもいい朝だ。

「朝だよー！」

そのとき、張りのある女性の声が、広々とした家の中に響いた。

凜の家は広い。家業として寺をやっているのだ。家の隣には、本堂と幾つかの小ぶりの建物からなる寺があり、同じ敷地内に建つ、寺と実際に住む家とは、渡り廊下で繋がれている。小ぶりの建物といえど、広さはまちまちで、中で十数人が眠れる程のものから、数十人がちよつと暴れられる程の部屋もある。が、大は小を必ずしも兼ねるというものでもなく、寺には維持に困り、持て余す部屋も多いので、住職である父を師範とし、一部は空手道場として開放していたりもした。

寺全体よりは家の方が断然小さいとはいえ、生活に必要なものは全て揃い、二階もついている。父母と凜の三人に、あと三人を加えたらちょうどよくなるというような広さだ。もとは寺の離れであったものを改築したのだと、凜は父から聞いていた。

「おはよー」

凜は、主に団欒に使う、畳敷きの広いリビングを突っ切りながら言った。続きになっているキッチンと一体になったフロアリングのリビングは、手前のリビングよりはやや小さい。中心に据えられた長方形の机では、甚平姿で足を組み、新聞を開いている父、京輔きょうすけが、その奥には、オレンジ色のエプロンをしてキッチンに立つ母、裕子ゆうこの姿が見えた。二人は凜の声を聞きつけ、同時に顔を向けておはよう、と言った。食卓の上に料理がまだ乗っていないことを除けば、いつも通りの朝だ。ここまでは。

「……なんでお前がいんの」

部屋の隅に余っていた三脚のうち、一脚を京輔の向かいに移動させ、そこに修平は座っていた。後頭部の髪は爆竹を破裂させたかのように跳ねており、まだ夢の境目を徘徊しているのか、下を向いて力な

く背を丸め、フローリングをじっと見つめている。凜には、そもそも自分の声が聞こえていないのか、それとも脳がまだ、問いかけられていることを認識していないのか判別しかねた。凜は自分の定位置に座った。隣の修平の顔を、下から覗き込む。

「……こいつ瞬きしてないよ、ちよつと昨日の夕飯に出た鮎に似てる」

「……昨日ずっと残って練習してたんだ。時間も遅かったから泊めた」

京輔は新聞紙をめくりつつそう言った。背筋はすっきりと伸び、五十をとくに過ぎたとは思えないほど、ブレのないしっかりした体格を保っている。短い髪には白髪も見当たらず、まず快活な印象を受けるが、目元を見ると、年齢相応の皺が刻まれており、すぐに年を経た柔和さが漂っていることに気付くだろう。

父のあつさりとした台詞を受け、凜は呆れつつ上目遣いで父を見た。

「年頃の娘がいるのに、それって父親としてどうなの？」

京輔が新聞から顔を上げ、ふつと笑う。

「襲われるようなタマかお前が。それに、大会が近いからな。合宿みたいなもんだ」

「ああ、そっか。今年はどんな感じ？」

「団体戦はそこそこだな。個人戦の要は……」

と京輔は修平をあごでしゃくつた。

「こいつだ」

「へえ！修平そんなに強くなったの？」

「身長が伸びたからな。技術も上がってる。場合によっては全国もあるかもしれん」

凜は腕を組み、感心したと頷いた。しみじみと言う。

「そうなんだ。入った頃はピーピー泣き叫んで、境内を逃げ回ってたのに……成長したねー」

「お前……小学生の時の話だろう」

京輔は苦笑した。脳裏に、凜が初めて、修平を家に連れてきた時のことが浮かぶ。なぜ凜がこいつを、と内心驚いたが、空手を教えてあげて、と言われた時には、驚きを通り越して困惑したものだ。あのときはまさか、二人が親友と呼べる仲になるなんて、思わなかった。

当の修平は、先ほどからゆっくり頭を下げ、ストーンと落としてかけてびくつと上げなおし、また下げる、ということを繰り返している。凜はそんな無防備な修平を眺め、吹き出しそうなのを堪えていた。京輔はそんな二人をしみじみと見つめる。目尻の皺が一層深くなる。瞳には、なんとも言えない感慨が漂っていた。

と、調理を終えたらしい裕子が振り返る。こちらで化粧つ気はまったくくないのに、若々しい雰囲気だ。肩甲骨ほどまでの髪を一まとめにして括り、いかにも意志の強そうな瞳を凜と修平に向けている。二人のやりとりを目の当たりにし、呆れたように笑いながら口を開いた。

「ほら、凜。修平君は練習で疲れてるんだから。ご飯運んで」

「はい……」

凜は席を立った。と、修平の背後に回って、一瞬考えた後、一気に椅子を前に押し出す。途端、下がっている途中だった頭が机の角に当たって、響き渡るような見事な音を立てた。修平は頭を押さえもせず、痙攣を起したように立ち上がり。

「ああ！？ 師匠、地震でありますか！」

予想外の反応に、凜は腹を抱えてうずくまった。京輔も上を向いて笑い声をあげ、凜を叱ろうとした裕子は、その口を手で押さえて耐えている。が、肩は震えていた。周りを見渡した修一は、数秒をもつて事態を把握したのか真っ赤になり、凜を睨みつけた。手がわなわなと震えている。凜が笑いで引きつった声で言った。

「朝食なのであります、少佐っ。至急、食料を運搬したく」

羞恥心のあまり、修一の頭の中から、一応、他人の家であること、師匠の家であること、それ以前に、凜の両親の前であることの、一

切合財が吹き飛んだ。今度こそ、凜の首に手をかけ、笑ってんじやねー！と前後に大きく揺さぶる。家の中には、より一層笑い声が響き渡った。

二人は隔たっていた。世界の色さえも違って見えるほどに。本当なら、すれ違うことすらないほどに。

第三章　・邂逅・（１）

『行つてきまーす！』

「行つてらっしゃーい！」

凜と修平は裕子に見送られ、揃つて寺を後にした。

すでに陽は険しい山の稜線を越え、街を眩く照らしている。四方は大小様々な山の連なりに囲まれ、北の山間から溢れて、流れ出したような形の岩の帯が、街を半分に隔てる。その丘とも呼ばれる帯の中腹に、凜達の住む桐龍寺とうりゅうじはあつた。寺へ続く石段は深い林の中へ分け入り、周りにぼつぼつとある真新しい住宅とは、経た年月だけでなく高度と鬱蒼と茂つた林でもって一線を画していたが、夏の朝の柔らかい日差しのもとでは、不思議に溶け込んでも見えた。

険しい傾斜を縫うように二人が駆け下りていくと、赤い屋根に白壁の家が見え、玄関には短髪みづみのふくよかな女性が仁王立ちしている。二人を見返す目は思いのほか鋭く冷やかで、それが気の好さそうな外見に反して意外だった。

「おばちゃん！おはよー！」

凜に向ける顔がすぐに弛緩して、いかにも体型にあつたまろやかさになる。

「おはよう。修平が昨日も悪かったねえ。お師匠さんにお礼言っておいてくれる？」

「うん！」

凜が普段よりもいくらか大げさに頷き、修平は横目でそれを見ながらため息をついた。と、修平の母―和美かずみが、首を勢いよく修平に向け、先ほどの目、仏頂面で口を開く。

「んで、修平、なんでこんなに遅くなつたわけ？」

「いや？別に？こう、師匠と空手の話とか」

傍目にも、修平が動揺していることは見て取れた。仕方ないという風に凜が口を開き、修平の朝風呂が長かったのだと説明すると、和美は無言で修平の首根っこを引っつき、ドアの中に放り込んで手荒く閉めた。凜がやれやれ、と芝居がかって肩をすくめる。

「まったくあいつは……人様の家をなんだと思ってるんだか」

「まあまあおばちゃん。あたし以外誰も止めなかったしさ。誰も悪く思っていないし、家に帰って学校の支度することを考慮して家を出るってことも、誰も言ってあげなかったし。あたし以外は」

凜は捲し立てた。和美は気を悪くした風もなく、鷹揚に笑って、

「ごめんねえ、よく言っておくから。まあでも、あんたと修平の仲間じゃないの」

と、凜の頭をぽんぽんと叩いた。凜は何故かアメリカ風に肩をすくめる。

「ま、そうだけど。でも朝からマラソンしたくないよ。だからって先に行くとするしさ」

「寂しがるんだよ、凜ちゃんがいないと。ウチにお嫁に来る気ないかい？」

その時扉が開いて、いつものエナメルバックを担いだ修平が顔を出した。靴をとんとんと地面を使って履きつつ、

「母さん、俺にだって選ぶ権利はあるんだよ」

こともなげに言った。

「ひどいっ！修平君、あたしのことは遊びだったのね！」

「んなこと言ってる場合か。あと三十分だぞ？」

「お前のせいデショ？！何をのほほんと……おばちゃん、行きます、おじちゃんにもよろしく言っといて！」

「はいはい、気をつけて行ってらっしゃい！」

「はい！」

凜は和美に笑顔を向けると、先に駆けだしていった修平の背を追って走り出した。走りながら背中に怒鳴りつけている。和美は一仕事

終わった、といった風情で、二人の背を見送った。それが見えなくなった頃、

「はぁ……青春だねえ……」

しみじみ息をついた。そして、さて、家事の続きをしようかと玄関に向かつて踵を返す。

途端、ぽつと鼻の頭に何か当たった。上を見上げると、薄い雲のかかった、見事な夏空が広がっている。しかし、乾いた地面には点々と黒い点が穿たれていく。両手を広げると、小粒の雨が一滴、手のひらを打った。

「お天気雨？ キツネが嫁にでもいくのかねえ。この季節に珍しい……」

一瞬二人の傘のことが意識に上ったが、すぐに干したばかりの洗濯物がそれを押しのけ、和美はバタバタと家の中に入った。主婦の一日は、まだ始まったばかりだ。

教室には、視線を交わし、言葉を交わし、どうしようもなくざわつく生徒たち。教師は、教壇机に静かに、両手をついた。図ったように、沈黙が訪れる。

教師は、その時を待って口を開いた。

「皆さん、夏休みが到来します」

「おー！」

「遊びたいですね？」

「おー！！」

「来年受験生ですけど？」

「だからこそっ！」

「なるほど。そんないい根性の皆さんにプレゼントです」

「おおおおおっ！？」

「丹精込めた化学の宿題プリント10枚です」

「おおおおおお……」

教室に、異様な熱気が膨れ上がって、儚くもしぼんだ。ふと、沈黙が落ち。そして、多くの生徒たちは笑いだす。

凜は片肘を付き足を組み、その光景を半笑いともなんとも言えない顔で眺めていた。

「先生、毎年よくやる……っていうか、あたしたちは去年担任だったからわかるけど、何でそうでない人もコレ知ってるの？」

「練習したみたいよ、去年一年七組だった人に聞いて。昼休みに練習してたもの。ま、去年は修平がいたからね」

打てば響くように返答したのは、凜の前に座る美鳥。既に配られつつある、化学のズッシリとしたプリントを凜の手に押し付けた。

凜はそれをイヤイヤ鞆に収めながら、

「ああ……。そういやあいつが最初に形作ったんだっけ、この『い。とも！』ごっこみたいの」

凜の脳裏に、嬉々として拳を振り上げ掛け声をかけ、クラスを巻き込んでいった修平の姿が思い出された。それをいきなりやって白けさせずに、周りを乗せてしまうのが修平の凄ところだと凜は思う。しかし間違いなく、本人は何も考えていないだろうと思いついた。

なんともくだらない物思いにふける凜の目の前では、美鳥と女子生徒が何やら話している。

「たぶんだけど、生徒のまとまり具合を見るためっていうのと、学園祭のための生徒の見極めじゃない？学園祭でクラスを引っ張る人を決めるのに……」

「はあー、やっぱり美鳥ちゃんって頭良いね。考えが深いというか」「ううん、そんなこと。それより、個人的にはめぐちゃん先生の方がよほど凄いと思う」

「そうだねー、もしそうだとしたら、先生もすごいよねー。あんなにカッコイイのに頭もいいなんて、言うことないじゃん」

「ホントにね」

（そこが一番気に入らない）

耳に入った会話に凜は思う。眉目秀麗、頭脳明晰、性格がよくて人当たりもよいなんて、こんなに気味悪いことはない。何かが納得いかない。世の中にはそんな人間ももしかしたら居るのかもしれないが、16年間の人生に賭けて、あの教師に限ってそれはないのだ。誰も信じてはくれないが。

凜は大げさに窓を振り仰ぐ。薄雲漂う、爽やかすぎるほどの夏空。眩く照る太陽。しかし、天気雨は朝から続き、未だ、晴天の空からは不似合いな雨が降っていた。

ざわつく教室には行き場のないため息を、凜は前髪へ吹きあげた。

第三章 - 邂逅 - (1) (後書き)

どうも、お久しぶりの作者、南陽子です。待っていてくれた人には大変申し訳なく、しかしありがたく、新しく読んでくれた人は、どうも初めまして。も一回、待っていて下さった方、本当にごめんなさい、そしてありがとうございます。

前回の投稿から投げ出しかと思われるほど長い間を開けてしまいました。ご心配かけた方もいらっしやっただしょうか、きちんと完結させるつもりのあることを明言しておきます。

どんなに時間がかかっても、未完で終わるということはしませんので、ちょこっと思いついていただいたら、新しく載っているかもしれません。遅筆で申し訳ありません。待っていていただけたらとても嬉しいです。

それでは長くなりましたが、これからもこの作品をよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8866e/>

R I N ～ 帰る夏 ～

2010年11月21日23時13分発行